

歌川広重「東海道五十三次」における エLEMENT のバトンリレー の手法化とその応用

01. 背景

私は「建築を介してその周辺の見方や認識を変え、風景や町の人の体験をつくりかえる」と言う言う建築の作られ方に興味があります。
そのような「周囲の事物と連なって、認識の上で事象を書き換える」ものとして歌川広重が55枚の冊子として手があげた、東海道五十三次を建築の設計を学びながら常々参照してきました。

02. 目的

「距離や時間を超えて、認識を繋ぐ中で何度も書き換える」私がそう感じた東海道五十三次における読み手が感じ取る空間変化のプロセスを修士設計を通して、建築設計の手法として確立させ都市空間に移植させます。
建築や都市が人に開かれるのではなく、人が建築や都市に歩み寄る端緒となるのではと考えました。

特徴② - 連番での編集行為について

No1の「日本橋」で正面の大名行列が、No2の品川で最終尾だけ描かれ遠景に映る集落の風景が、No3川崎では水平の構図をつくる舞台となる。といったように、個々の作品以上に、作品間の関係性が意味や内容をつくっていきます。



特徴③- 認識の上書きについて

17番「由比」と47番「亀山」のように連番を超えて、ELEMENTが引き継がれ読み手に固有の認識を作っていきます。このようなことを踏まえ、街道が描く「一本の時間軸を超えて、読み手の認識を連作の中で何度も書き換える」そんな描き方をしています。

04. 小結 1: ELEMENT のバトンリレーの手法化

「東海道五十三次 (保永堂版)」のELEMENTを「object」と「subject」に分け連作の連なり方を分析した。[1. 板付き]「object」が変わっても一部の「subject」が別の位置で残る。[2. アテ残し]目印となる「subject」の性質のみが引き継がれ、他のELEMENTは変わる。



03. 歌川広重作「東海道五十三次について」

街道の案内図である「東海道五十三次」は葛飾北斎など様々な人が、風景を端的に示す為、説明的に描いたのに対して、透視図法のような全体の骨格をつくる技法を用いず、主題である道は最小限に、時には実際にはない物も加え脚註しながら、様々な人物や時間に繰り広げる出来事をあらゆるELEMENTの配置関係のみで空間を記述していること。また、個々の作品以上に、関係性が意味や内容をつくっていきます。また 分析を通してELEMENTが引き継がれ読み手に固有の認識を作っていくことがわかりました。

特徴①

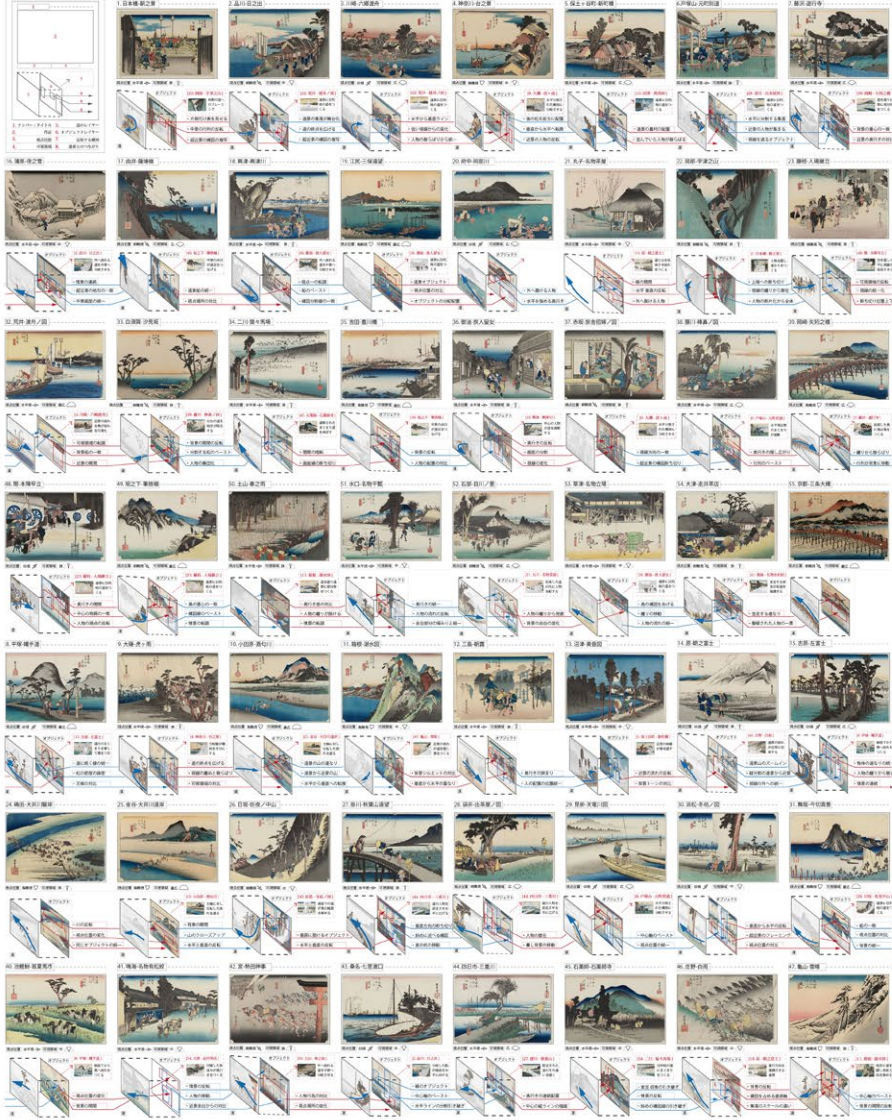
主題である道は最小限に実際にはない物も加え脚註しながら、様々な人物が繰り広げる出来事をあらゆるELEMENTの配置関係のみで空間を記述します。



分析

それぞれの絵の中の要素を下記のように「object」「subject」と分類し55枚の連なり方の分析を行います。

- OBJECT 「別のELEMENTの一部のみを見せて興行きを示唆するもの」
- SUBJECT 「見えない断片を読み手の頭で補正させるもの」

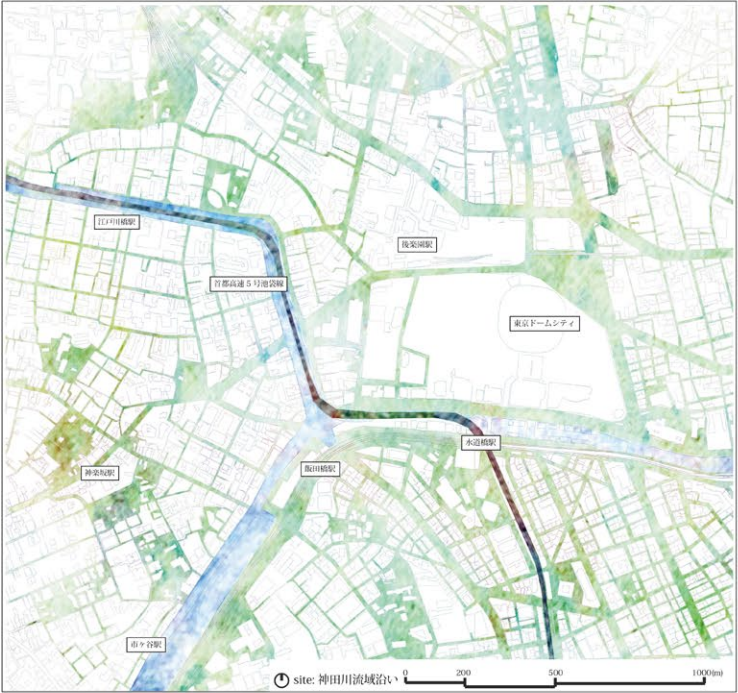


05. 小結 2: バトンリレーがつかう副次効果について



連番を超えて、一部のELEMENTが引き継がれ認識を上書きするような描き方が55枚中48箇所見られたので、上書きの際に行われる空間の変化を26パターンに分類し整理しました。これらのことから「距離や時間を超えて、読み手の認識を書き換える」そんな描き方をしています。これらの分析を通して設計の際には、エリアに散らばる同じELEMENTに対して、異なるシーケンスで建築が関わることで、ぶつ切りになった川辺の風景を認識の中で紡いでいきます。

■06. 敷地について



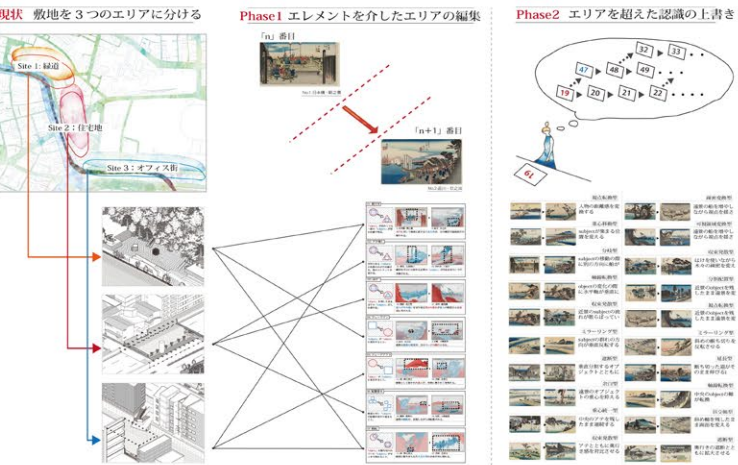
神田川について

かつての神田川。今では川の風景は都市生活の隙に隠されぶつ切りにされています。

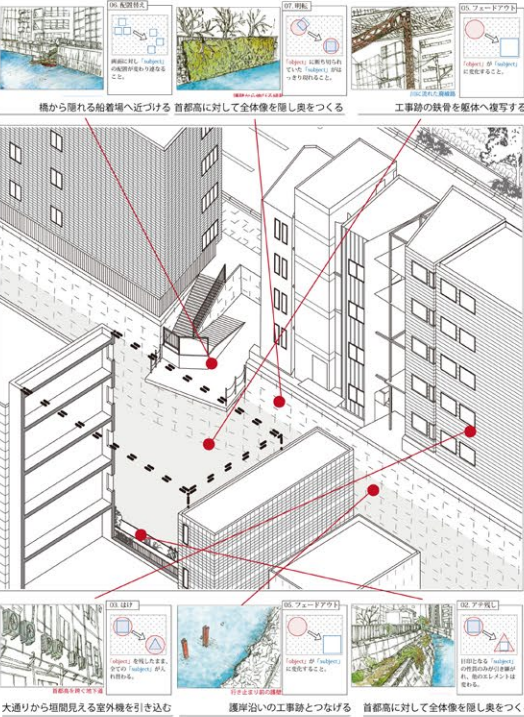
今では川の風景は都市生活の隙に隠されぶつ切りにされています。

護岸を伝う植物を見ると「奥に川がある」と微妙に感じられるように、五十三次のように object と subject の関係がないだけで、川を想起できるエレメントが無数にあります。

■07. 計画について

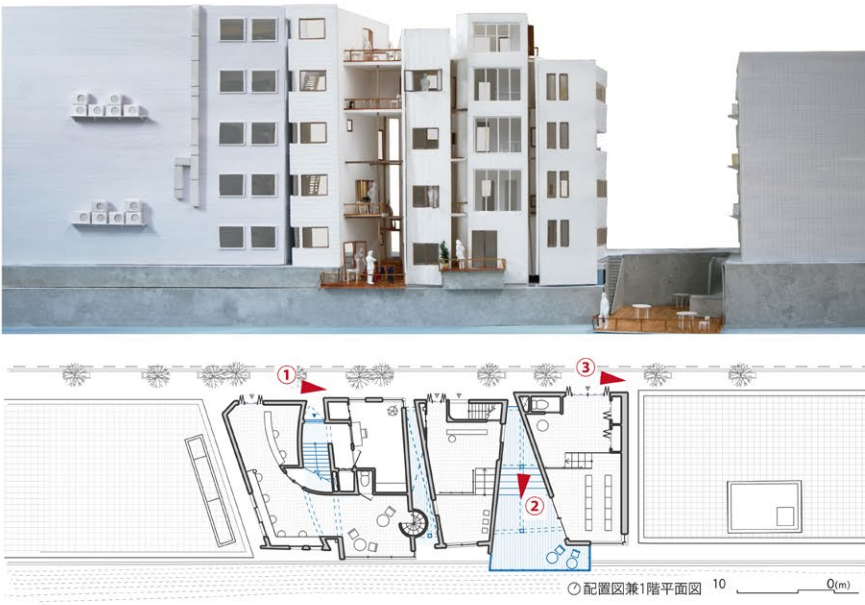


■Site 1: 川を背にするオフィスビル



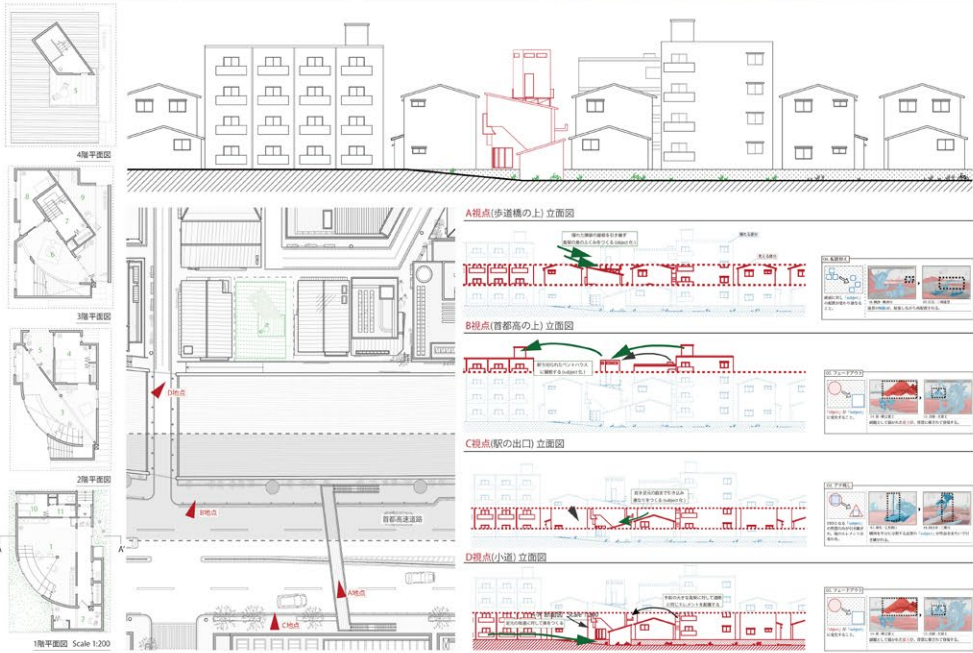
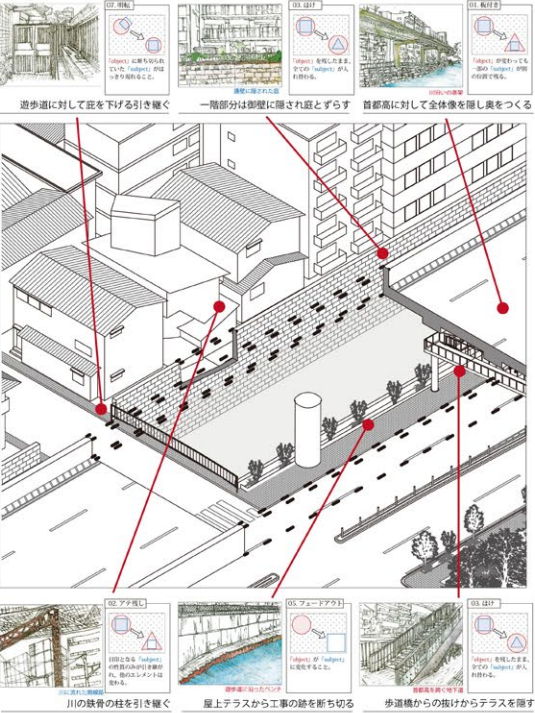
敷地について

神田川と大通りに挟まれた幅7m程の細長い敷地です。タイトな敷地にに対し無骨な躯体は大通りに対してテナントを形成し、川側を裏動線に取り、水道橋からの抜けは、ビルの裏側が並び、ビルが川と大通りを遮断しています。設計により生まれたヴォイドから川のエレメントが垣間見え、周囲の空隙は川を想起させる object となります。



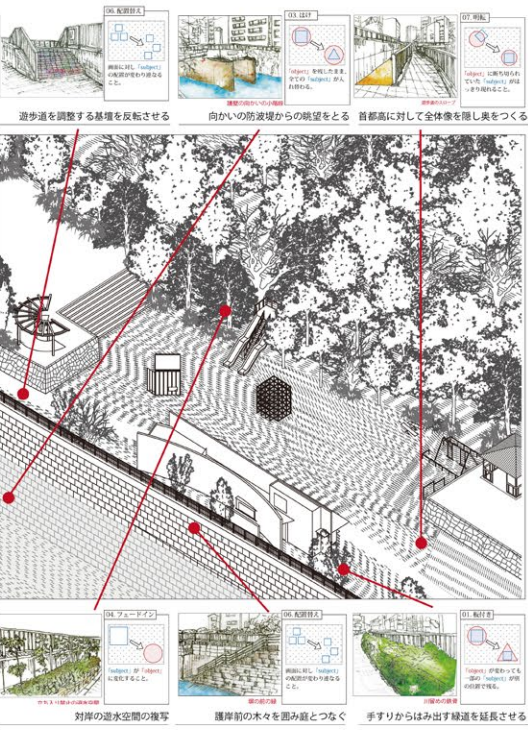
■ Site 2: 高架に隔たれた住宅地

敷地は江戸川橋駅の対岸にある住宅地です。
首都高や歩道橋、護壁、高層マンションなどに囲まれ周囲から分断されています。それぞれの視点場から異なる断片が切り取られる住宅において「アデ付き」を用いて、各視点場から見えるエレメントを引き込んだり、引き込まれたりして構成されます。単体ではなく、周囲の object と subject を識別し何かに擬態するようなこの住宅では、敷地を超えた広さと奥行きをうみます。



計画物単体ではなく周囲の object と subject を識別し何かに擬態するように住まう

■ Site 3: 斜面沿いの緑道



■ 08. エリアを超えた認識の上書き 3つのエリアに散らばる同じエレメントに対して、異なるシーケンスで建築が関わることで、ぶつ切りになった川辺の風景を認識の中で紡いでいきます。

